

産業廃棄物処理場増設に係る
埋蔵文化財調査報告

富山県 婦中町

吉谷遺跡 発掘調査報告

1995年3月

婦中町教育委員会



図01（北東から）

序

吉谷遺跡は、婦中町の西部に広がる丘陵地帯に位置し、豊かな自然に囲まれた環境にあります。

今回、婦中町教育委員会では、産業廃棄物処理場の増設に先立ち、本遺跡の発掘調査を実施致しました。

調査では近世の炭焼窯跡などの遺構の他、縄文時代の土器が出土しました。炭焼窯は当時山間部に暮らしていた人々の生活状況を知る良い資料であり、石を積んで構築した小規模な窯からは自給自足的な暮らしの光景が窺えます。

本書はこの発掘調査の結果をまとめたものであり、今後の調査研究を進める上での参考資料として、また埋蔵文化財に対する理解を一層深める為に役立て頂ければ幸いに思います。

終わりに、調査にご協力頂きました株式会社富山環境整備の方々、ご指導頂きました関係者の方々に、心から感謝申し上げます。

平成7年3月

婦中町教育委員会

教育長 清水 信義

例　　言

- 1 本書は、富山県婦負郡婦中町吉谷字大谷地内に所在する吉谷遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
- 2 調査は、株式会社富山環境整備の委託を受けて、婦中町教育委員会が実施した。
- 3 調査期間・面積は次のとおりである。

　　調査期間 平成6年5月10日～同年6月6日（延べ16日）

　　調査面積 460m²（I地区250m²、II地区210m²）

- 4 調査体制は以下のとおりである。

　　調査担当者 婦中町教育委員会 生涯学習課 文化財保護主事 片岡英子

　　富山県埋蔵文化財センター 調査課 主任 神保孝造

　　調査事務局 婦中町教育委員会 生涯学習課 課長 平井光雄

　　同 同 文化振興係長 見波重尋

　　なお、作業員・重機・測量・器材については株式会社富山環境整備より多大な御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

- 5 資料の整理・本書の編集と執筆は調査担当者がこれに当たり、本文・挿図は片岡、写真図版は神保が担当した。
- 6 資料整理期間中、高梨清志氏・堀内大介氏より御教示、御協力を頂いた。記して謝意を表したい。
- 7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

　　方位は真北、水平基準は海拔高である。

　　遺構の表記は次の記号を用いた。土坑：SK、溝：SD、不明遺構：SX

- 8 出土品及び記録資料は、婦中町教育委員会で保管する。

- 9 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

　　生田寿美子・中坪千春（整理作業員） 大野淳也（発掘調査補助員）

本　文　目　次

I 序章	1	III まとめ	4
1 遺跡の位置と環境	1	参考文献	
2 調査の経緯と経過	2	写真図版	
II 調査の概要	2	報告書抄録	
1 概況	2		
2 I 地区	2		
(1) 遺構	2		
(2) 遺物	3		
3 II 地区	4		

挿　図　目　次

第1図 周辺の遺跡分布図及び一覧

第5図 遺物実測図

第2図 地形と調査区割図

第6図 II地区遺構配置図

第3図 I地区遺構配置図及び遺構断面図

第7図 II地区窓01

第4図 I地区窓01、02・03・05・07

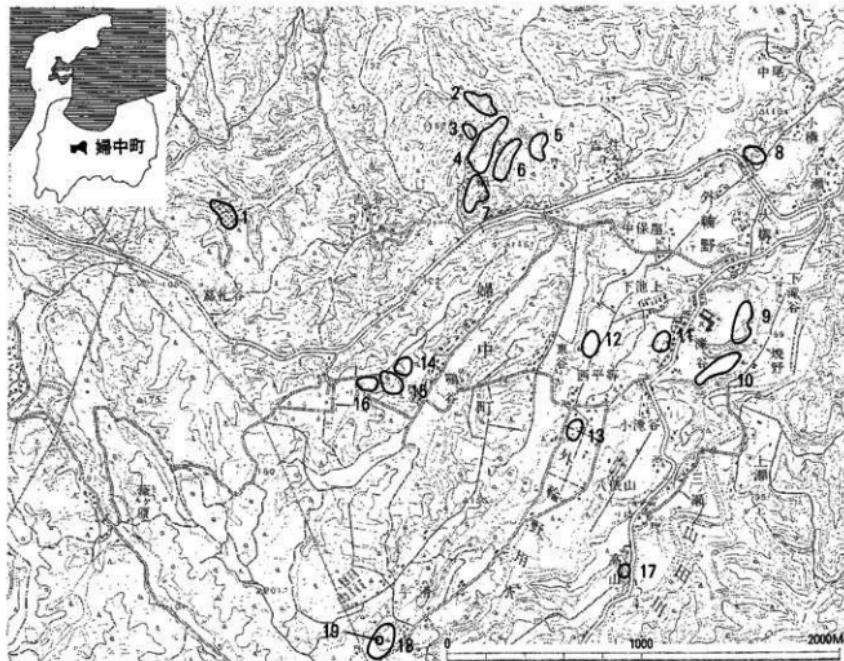
I 序 章

1 遺跡の位置と環境

婦中町は富山県の中央部にあり、北側は県庁所在地である富山市と接する。町の地形は、概ね西側の丘陵部と東側の平野部に二分される。丘陵部は県中央部に南北に走る呉羽丘陵の南方に連なる丘陵で、山田川によって二分されている。一方、平野部は神通川とその支流である井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。

本書で報告する吉谷遺跡は、富山県婦中郡婦中町吉谷地内に所在し、西方の砺波市境より東に300mの位置にある。遺跡のある場所は、射水丘陵山腹にある谷の両斜面に立地しており、現況は山林になっている。

周辺の遺跡の殆どは旧石器・縄文時代に帰属し、吉住遺跡・淹谷遺跡・小淹谷遺跡・上池上遺跡・西上遺跡・外南遺跡・細谷NO.1～6遺跡・石山I～III遺跡・牛滑遺跡などが挙げられる。そのうち、淹谷遺跡・小淹谷遺跡・牛滑遺跡では発掘調査により堅穴住居跡が確認されており、なかでも牛滑遺跡については出土した土器が北陸地方の縄文中期中葉土器の模式となっていることが特筆される。



No.	遺跡名	時代	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1	吉谷遺跡	縄文古墳～近代		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
2	細谷No.1遺跡	旧石器・縄文			6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
3	細谷No.2遺跡	縄文				7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
4	細谷No.3遺跡	旧石器・古代					8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

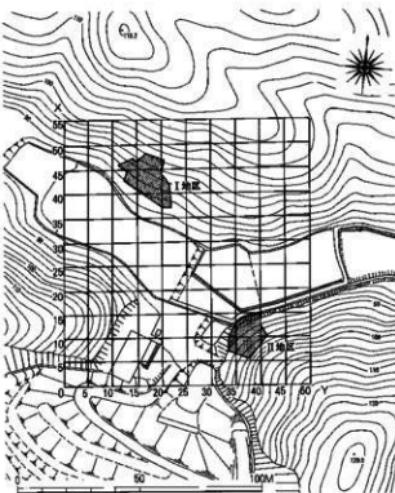
第1図 周辺の遺跡分布図(1/25,000)及び一覧

2 調査の経緯と経過

吉谷遺跡の発見は、平成元年12月に行われた分布調査による。調査対象地は、産業廃棄物吉谷区分場埋め立て工事予定地内の約31haであった。この調査によって、谷斜面の切り出された面に製炭遺構と推定される地層が數ヶ所に発見され、木炭片や窓壁片が採集された。平成2年4月にそれらの地区を対象とした試掘調査が実施され、炭焼窯をはじめとする遺構が確認された。この為、婦中町教育委員会では事業者と協議の上、遺構が確認された範囲について本調査を実施することになった。

調査の手順は、まず重機により表土掘削を行い、その後基準杭を設定した。調査で使用した座標は南北軸をX軸、東西軸をY軸とし、軸方向はX軸が真北を示すように設定した。またグリッドの値は $2 \times 2\text{ m}$ の区画を一単位とした。

調査区の地区割りについては、前述の分布・試掘調査で谷の北側斜面をI地区、南側斜面をII地区と区分していた為、今回の調査でもこの呼称を引き続き使用した。



第2図 地形と調査区割図 (1/2000)

II 調査の概要

1 概況

両地区は中央にのびる谷を挟んで55m離れた位置にある。I地区の標高は87~96m、II地区的標高は84~94mであり、両地区ともに斜面の角度はかなり急である。

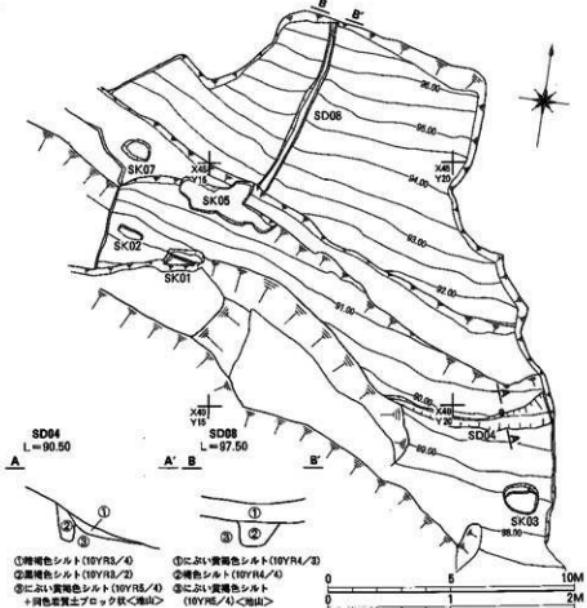
一帯の基本層序は、地山のにない黄褐色シルトの上に暗褐色シルトが堆積するものである。遺物包含層は遺存しない。地山までの深さは地表より約20cmである。

2 I 地区

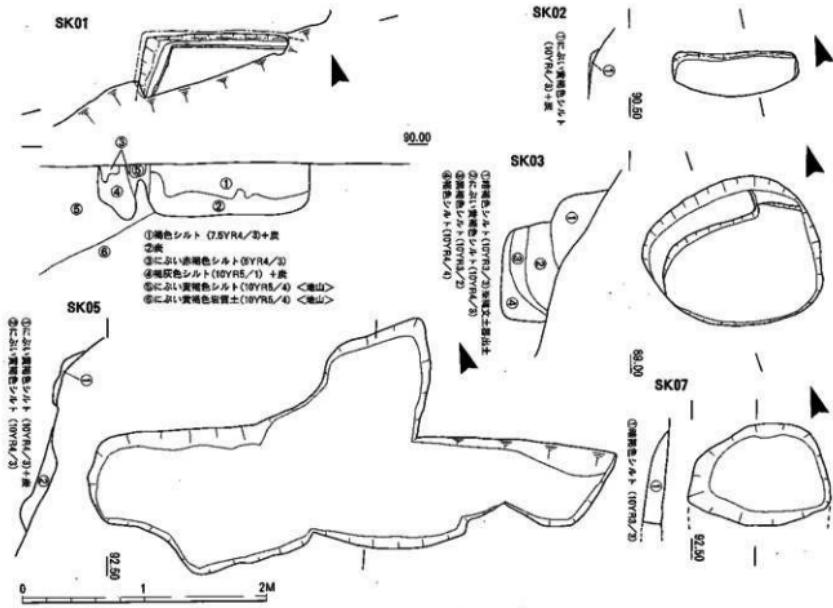
(1) 遺構

当地区で検出された遺構は、土坑5基と溝2条である。

SK01 焼壁土坑である。南側は



第3図 I地区遺構配置図 (1/200) 及び遺構断面図 (1/40)



第4図 | 地区 畫01,SK02-03-05-07 (1/40)

削平されているが、平面形は長(正)方形を呈していたと思われる。また、床面の周囲には幅7cmの浅い排水溝が巡っている。覆土には炭が混じり、特に下部に厚く堆積している。

S K02 長軸100cm・深さ10cmを測る焼壁土坑で、覆土に炭が混じる。南側を中心として全体が削平されている。

S K03 長軸145cm・深さ60cmの楕円形を呈する土坑で、縄文土器が出土した。掘り込みの角度は垂直に近く、北側壁には段が一段つく。

S K05 長軸42cm・深さ12cmの不整形の土坑である。

S K07 長軸110cm・深さ15cmの楕円形を呈する土坑である。

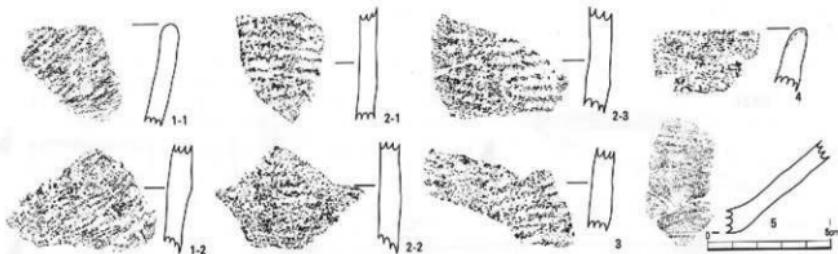
S D04 幅60cm・深さ10cmの浅い溝である。等高線に平行するように走り、東側は調査区外にのびる。

S D08 幅33cm・深さ20cmの溝である。等高線に直交するように走り、北側は調査区外にのびる。

(2) 遺物

遺物は縄文土器のみであり、全て S K03より出土したものである。

1-1・1-2は同一個体で、横位の条痕文を施す深鉢の口縁部と脚部である。晩期中葉の中屋式に比定できる。2-1・2-2・2-3は同一個体で、横位の縄文を施す深鉢の脚部である。3は深鉢の脚部で横位の縄文を施す。4は深鉢の口縁部で、端部に指頭圧痕を残す。5は浅鉢の底部で、内外面を磨ぐ。

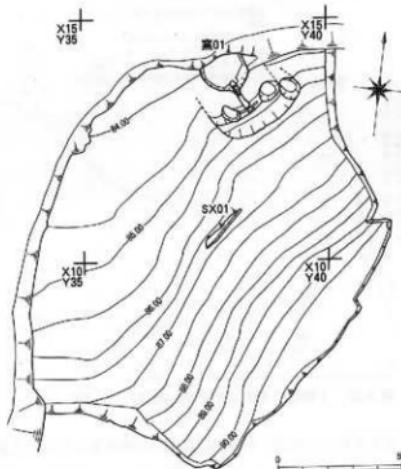


第5図 遺物実測図 (1/2)

3 II 地区

当地区では炭焼窯1基を確認した他、中央部に人为的に削り出された平らな面(SX01)を検出した。

窯01は、調査区北側の斜面の端にあり、窯口側は削平されている。窯の構築法は、斜面に窯体を掘り込み、窯壁に角張った岩石を7段程度垂直に積み上げている。炭化室の平面形は、最大幅が奥寄りにあるいじじく形を呈していたものと考えられる。残存する規模は石の内側で最大幅145cm・奥行き110cmを測る。また窯床は、やや窓口に向かって下り気味で、石は敷かれておらず、酸化した層の上に炭がレンズ状に堆積している。炭化室内の覆土には、窯壁に使用された石や焼土ブロックが崩落していた。煙道は、幅25cm・長さ170cmで傾斜角度は50°を測り、貼り床を施す他、内部には天井に被せていましたと見られる偏平な石が落ち込んでいた。窯の外周は四角く削り出されており、梢円形の溝みが3箇所に見られた。



第6図 II地区遺構配置図 (1/200)

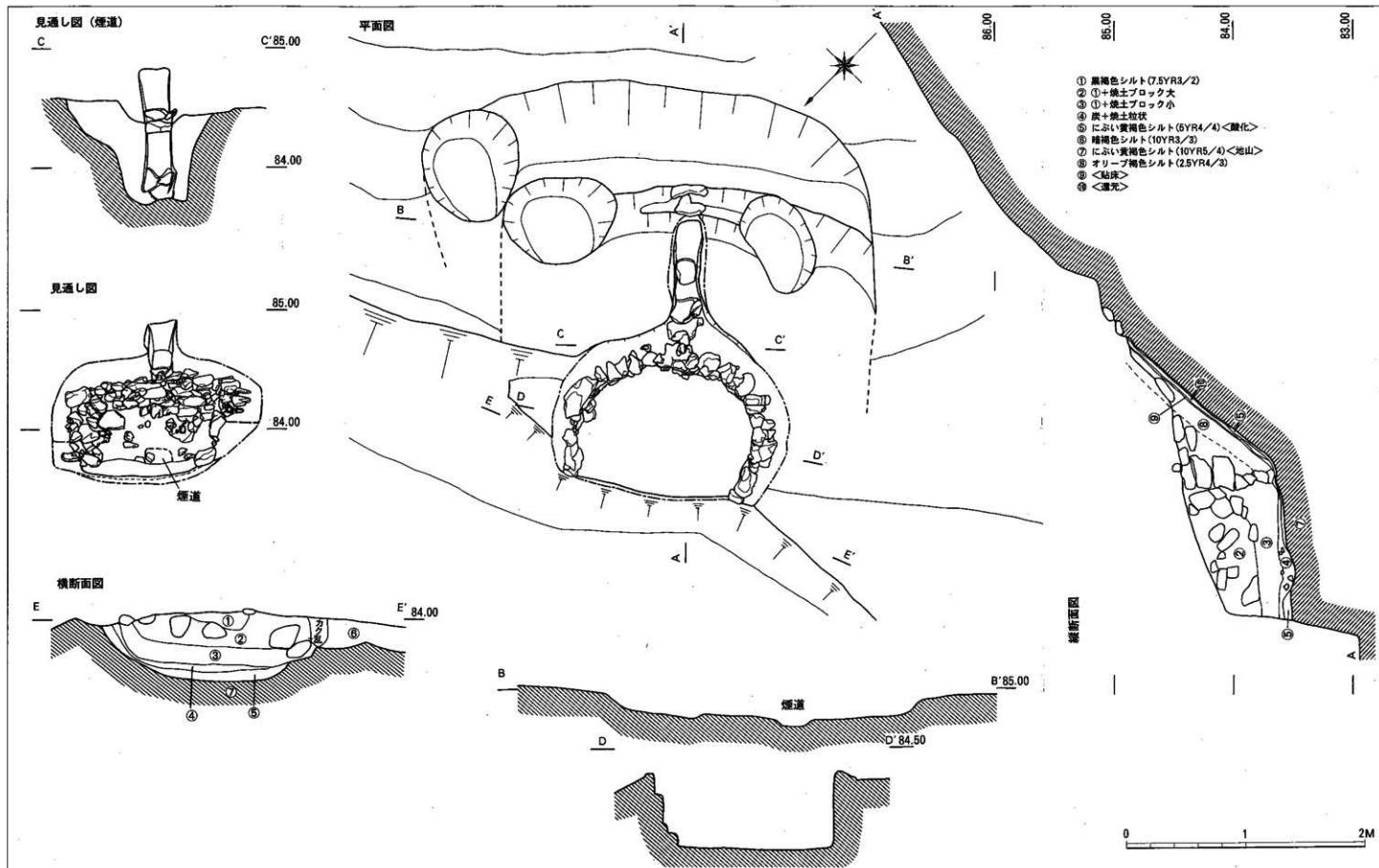
III まとめ

県内の炭生産は、古代には吳羽・射水丘陵が一大生産地帯となっており、專業集団が登り窯状の土窯で製鉄用の炭を組織的に生産していた。一方、吉谷跡の炭焼窯は、それらとは窯の築造年代や形態のみならず製炭目的を異にするものである。この窯は規模が小さく単独で存在する為、一家族程度の単位で暖房や燃料用の炭をつくる程度の自給自足的な要素が強いと思われる。出土遺物が無い為年代特定は難しいが、小型の石窯が出現し普及していく近世から近代に属するものと考えられる。同様の窯としては立山町での発掘例がある(立山町教委1988)。SX01は窯周囲を削り出した痕跡である可能性もあるが、詳細は不明である。尚、焼土坑は簡易な炭焼方法として使われたものであろうが、同じく出土遺物が無く年代特定は難しい。

S K03については、出土土器の年代より繩文晩期に帰属するものと考えられるが、周辺に同時期の遺構が無く単独で存在していた為詳細は不明である。

参考文献

- 立山町教育委員会1988『立山カントリークラブ増設工事地内遺跡群発掘調査概要』立山町文化財調査報告書第7冊
村田文夫1991『発掘調査された炭焼窯の基礎的研究』『物質文化(55)』物質文化研究会



第7図 II地区窯01 (1/30)

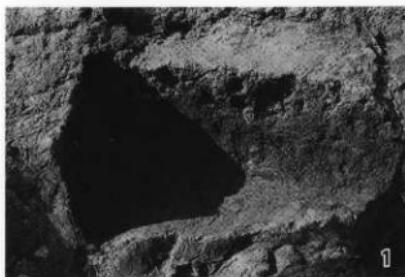


1

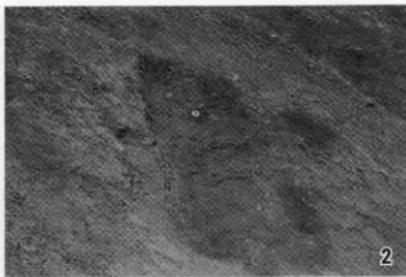


2

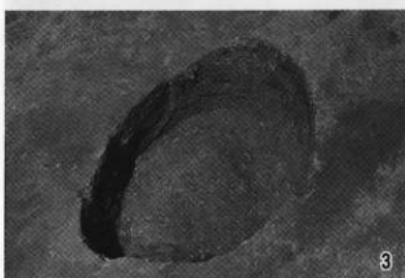
図版1 1. I地区全景(上から) 2. I地区全景(南から)



1



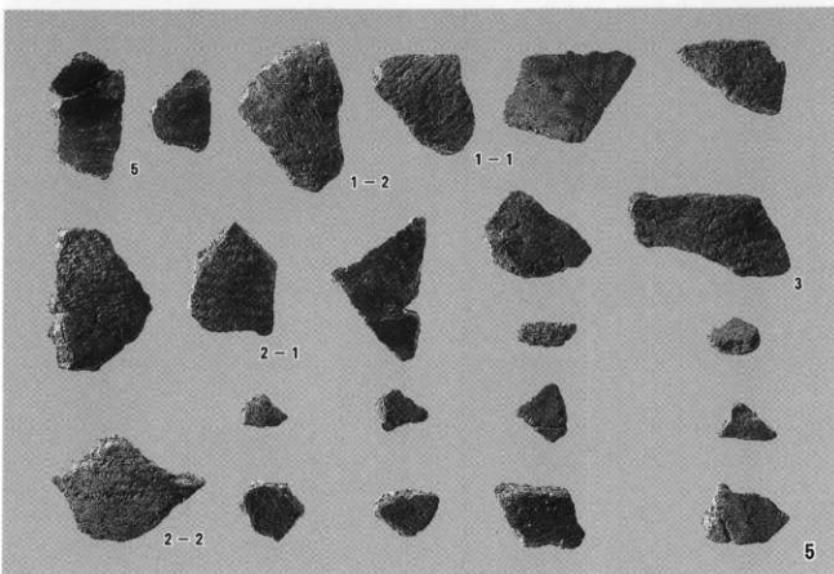
2



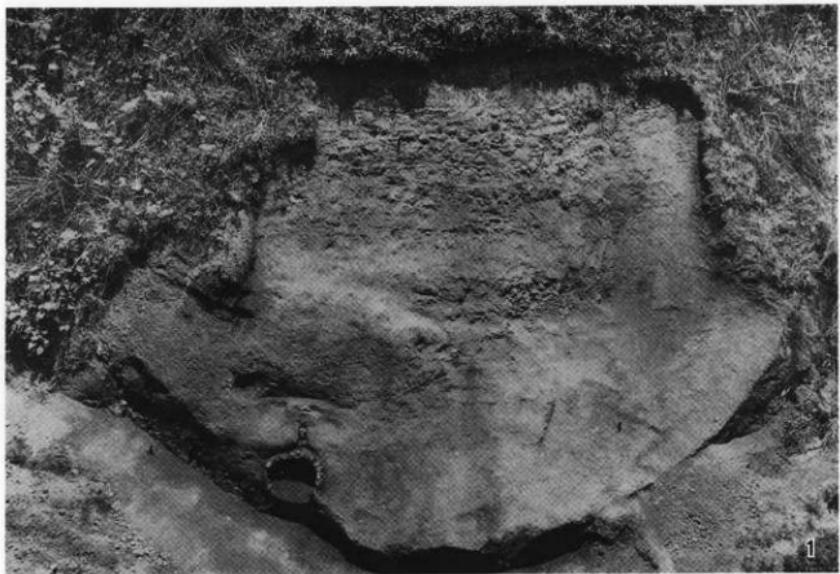
3



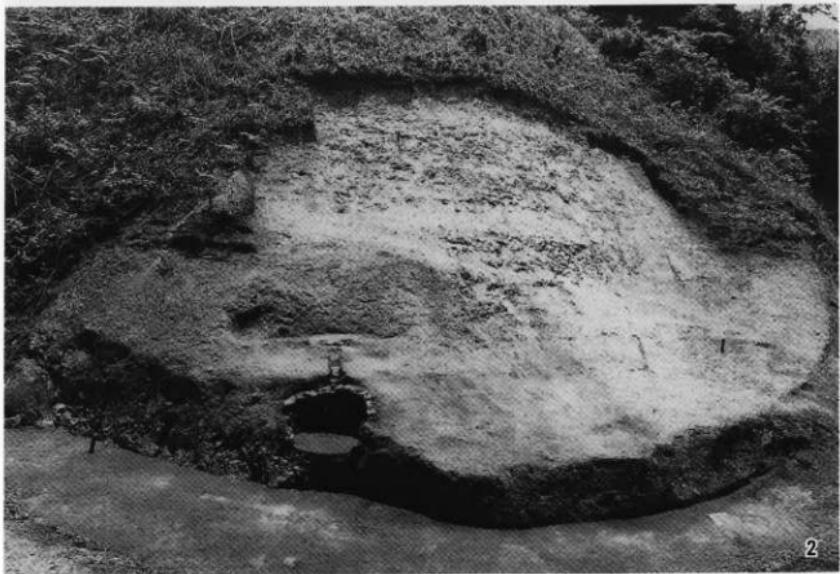
4



図版2 1. SK01 (南から) 2. SK02 (西から) 3. SK03 (東から) 4. 作業風景
5. I地区出土遺物 (1/2, 数字は実測番号)



1



2

図版3 1. II地区全景（上から） 2. II地区全景（北西から）



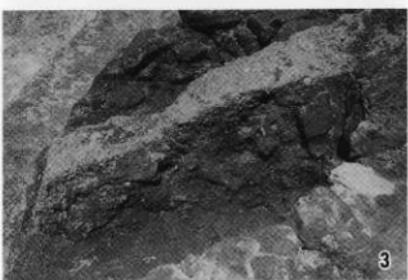
図版 4 炭窯01（北西から）



1



2



3



4



5



6

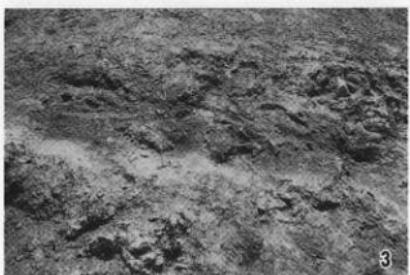
図版 5 1. 窯01検出状況（北西から） 2. II地区調査前（南西から） 3. 同窯内層位（南西から）
4. 同煙道部（南東から） 5. 同窯壁断面割り状況（西から） 6. 同掘方検出状況（北西から）



1



2



3



4



5

図版 6 1. 黒01掘方検出状況（南東から） 2. 同床面断割り状況（西から） 3. SX01検出状況（北西から）
4. 作業風景 5. 発掘調査参加者

報告書抄録

ふりがな	とやまけん ふちゅうまち よしたに いせきはっくつちょうさ ほうこく
書名	富山県婦中町吉谷遺跡発掘調査報告
シリーズ名	産業廃棄物処分場増設工事に係る埋蔵文化財調査報告
編集者名	片岡英子 神保孝造
編集機関	婦中町教育委員会 富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL0764-65-2111 〒930-01 富山県富山市茶屋町206-3 TEL0764-34-2814
発行機関	婦中町教育委員会
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL0764-65-2111
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉谷遺跡	富山県婦負郡 婦中町吉谷字 大谷452 ほか	016362	084	36°38'40"	137°4'15"	940510 ～940606	約460m ²	産業廃棄物処分場 増設工事に係る事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉谷遺跡	製炭遺跡	縄文 近世～ 近代	縄文 土坑 近世～近代 炭焼窯 焼土坑 溝		縄文土器（晩期）			

平成7年3月31日発行

**富山県婦中町
吉谷遺跡発掘調査報告**

編集 婦中町教育委員会

富山県埋蔵文化財センター

発行 婦中町教育委員会

富山県婦負郡婦中町速星754

印刷 佛なかたに印刷

